バルセロナの移民にみるカタルーニャ語使用と教育をめぐる現状
―中国系移民の場合を中心として―

Present Circumstances of Catalan Language Use and Education among Immigrants in Barcelona: Case of the Chinese

山本　須美子
Sumiko YAMAMOTO

はじめに

本論の目的は、スペインのカタルーニャ州バルセロナにおける移民にみるカタルーニャ語使用や教育について検討した上で、1990年代から急増した中国系移民の場合におけるカタルーニャ語使用や教育の現状を筆者の調査に基づき明らかにすることである。現在、スペインではカスティーリャ語が国家公用語として定められているが、いわゆる「歴史的自治州」（1978年現行スペイン憲法で定められたスペインを構成する17自治州、２自治都市は含めない）では、フランコ独裁政権（1939年から1975年）崩壊後、各自治州固有の言語も自治州内においては同様に公用語として認められている［福田 2000：23］。自治州公用語として認められているのは、カタルーニャ語、アラン語、バレンシア語、バスク語とガルシア語がある［川上　2009：217］。固有の言語に係わる各自治州の政策は多岐にわたり、また州ごとにそれぞれ特徴があるが、もっとも先端的なのがカタルーニャ州である。2006年の自治憲章では、カタルーニャ語を「通常的で優先的な使用言語」としている。これは、カタルーニャ語をカスティーリャ語よりも優先させ、学校教育においてもカタルーニャ語は教育対象であるのみならず、それによって教育が行なわれる言語とされている［川上 2009：220-221］。

移住先の言語を知らない移民は、移住先の言語を学ぶことになるが、ほとんどの場合は一つの公用語を学ぶ。しかし、カタルーニャ州では国家公用語であるカスティーリャ語だけではなく自治州公用語であるカタルーニャ語も学ぶことになる。カタルーニャ州への移民は、1960年代から1970年代の南スペインからのカスティーリャ語話者である国内移住者と、国内移民に対して1990年代以降の「新移民」と呼ばれる海外からの移住者に分けることができる。これら移民の流入はカタルーニャ州の言語状況を半世紀にわたる時間の経過の中で変化させてきた。海外移民の流入は、スペインが1986年に

EC に加盟し経済成長を遂げ、外国人労働者に対する需要が生まれたことによるものである。最新の2017年統計によると、バルセロナの外国人人口は、モロッコ系122, 732人を含むアフリカ系は160, 776人、南アメリカ系は155, 591人、アジア系は132, 737人である［Idescat 2017］。

公用語併用というバイリンガル環境に移住した移民にみるカタルーニャ語使用についての研究は、バルセロナにおいて1960年代から増加した南スペインからのカスティーリャ語話者である国内移住者にみる周辺化について論じた研究［Woolard 2003］、3, 578人のカタルーニャ州の海外移民第二世代を対象に言語的統合を検討した研究［Alarcón and Rubio 2013］、アフリカ系移民を対象とする成人教育としてのカタルーニャ語教育に関する研究［Pujolar 2010］、そしてカタルーニャ在住日本人の言語使用に関する研究［福田 2013］がある。中国系移民を対象としたカタルーニャ語に関する英語文献としては、カタルーニャ州の中国系移民の言語状況についての概要を述べたもの［Sáiz Lópey 2004］、あるいは前述した移民第二世代3, 578人を対象としたカタルーニャ州の言語的統合に関する研究［Alarcón and Rubio 2013］の中で言及されてはいるが、中心的に扱われてはいない。しかし、言語正常化コンソーシアム（Consorci per a la Normalització Lingüística：CPNL）を構成する22の言語正常化センターの一つであるバルセロナのサンタ・クローマ・ダ・グラマネート地区フォンドにある言語正常化センター・レウラ（L'Heura：以下レウラと略称）では、中国語の話せるスタッフを雇い中国人向け特別クラスを設置する等の取組みがなされ、さらに学校でカタルーニャ語を学ぶ中国系の若い世代も増加している。これは、特に2000年代になってスペインに流入した中国人が急増したからであり、移民へのカタルーニャ語教育のあり方を論じるのに中国系移民は看過できない存在となっている。最新の統計によれば、2017年のスペインの中国系人口は183, 387人である［INE 2018］。イタリアと並んでヨーロッパの「新しい」中国系コミュニティとして注目すべき存在となっている。

中国では1978年の改革開放政策以降、人の移動の制限が緩み、都会でも田舎でも経済的社会的期待が高まり海外移住が容易になったが、1980年代の始めには、まだスペインにおける中国人人口は少なく、1, 000人にも達していなかった。スペイン政府が1985年７月に制定された法律に基づいて初めて実施した正規化後の1986年以降から、中国人人口は徐々に増加した［Nieto 2003：219-220］。1986年と1991年の２回の正規化によって、中国人人口は前年の50％増となった。この流入は、特に1989年の天安門事件後の伝統的移民送り出し地域の移民フィーバーとも重なった［Beltrán 1998：219］。1980年代からの観光業が発展したことも、中華レストランの増加と労働力としての家族呼び寄せを促した。また、浙江省青田や温州市からの以前の移住者によって確立されたネットワークの再活性化によっても移住が促進された［Nieto 2003：219-220］。2000年代になって中国人人口はさらに急増したが、その背景には1990年代の中国東北部での国営企業の再編による失業者の増加や、中国が外国資本の重要な投資先となり世界で最も大きな製造元となったという中国の構造改革も関連している[1]。

スペインの中国系移民の中で最大の集団は浙江省青田出身者であり［Nieto 2003：219］、温州市も

1　スペインの中国系コミュニティの歴史的背景と特徴については山本［2018］参照。

含めた浙江省出身者が約７割を占め、教育程度は低い者がほとんどである［Masdeu 2014：６］。1980年代前半になると、中国人がマドリードとバルセロナの特定な地域に集まり可視化し始め、1990年代後半になるとその傾向がより強くなった［Beltrán 2005：286］。フランスやイタリアで生産された皮革製品や鞄を扱う卸売業者と15年以上前からイタリアとフランスで展開していた縫製業者を中心に、マドリードとバルセロナに集住地区が形成された。マドリードの中国系人口は60. 715人［INE, Comunidad de Madrid 2017］、バルセロナは49, 703人、カタルーニャ州は60, 266人である［Idescat 2017］。

筆者は中国系移民へのカタルーニャ語使用や教育をめぐる現状を把握するために、2017年９月と2018年９月にバルセロナにおいて、レウラの中国系移民担当者や幼稚園児を持つ中国人の母親、そして中国系の若者へのライフヒストリーを構成するインタビューを実施した。言語正常化センターにおける一つの民族集団を対象とした取組みはこれまで明らかにされたことはない。また、カタルーニャ州の海外移民次世代のカタルーニャ語使用の現状から言語的適応の多様性を検討した研究［A lcón and Rubio 2013］はあるが、バルセロナにおける移民次世代のカタルーニャ語の学習経験とアイデンティティ形成との関係性を論じた研究は管見の限りない。

分析の手順としては、Ⅰにおいて、第一にカタルーニャ言語政策の変遷について、第二に学校での「言語漬けプログラム」について検討した後で、カタルーニャ語とカスティーリャ語の言語使用の現状について明らかにする。Ⅱでは、移民が流入することによるカタルーニャ語使用をめぐる変化について、第一に1960年代に増加した国内移民の場合、第二に1990年代以降に増加した海外移民の場合について先行研究に基づいて述べる。Ⅲでは、中国系移民にみるカタルーニャ語使用と教育をめぐる現状について、筆者の調査に基づいて、第一にレウラの中国系住民に対する取組み、第二に幼稚園児をもつ高学歴中国人女性２名の子どもへのカタルーニャ語教育についての捉え方、第三に中国系の若い世代にみるカタルーニャ語の学習経験とアイデンティティ形成の関係性を検討する。最後にⅣで、以上を踏まえて、バルセロナにおける中国系移民にみるカタルーニャ語使用と教育をめぐる状況を考察する。

Ⅰ．カタルーニャ言語政策と言語使用状況

１．カタルーニャ言語政策の変遷

1939年から1975年まで続いたフランコ政権は「純スペイン」の統一を掲げ、スペインの唯一の言語はカスティーリャ語であるとして、その他の言語の公的使用を一切禁じる強力な言語政策を展開した。カタルーニャ語やバスク語、ガルシア語は新聞、テレビなどのマスメディアのみならず教育の場からも一掃され、あらゆる公的な場の言語はカスティーリャ語のみとなった。カスティーリャ語による教育や、路地名・戸籍上の名のカスティーリャ語への変更が強制されるなど、フランコの言語政策

は非常に徹底したものであった。「言語正常化」はこうした政策の結果、「本来の」姿を失ったとされる各言語の立て直しをはかり、社会における通常使用と目指す試みであり、カタルーニャ、バスク、バレンシア、ガルシアの各自治州において法制度化された［福田 2000：23］。そしてフランコ体制下、経済発展が著しかった1960年代から1970年代に、カタルーニャ州にスペイン国内から大量の移民が流入し、カスティーリャ語の話者が急増し、その後の言語状況に大きな影響を与えた［松本 2015：79］。

1979年に設置されたカタルーニャ自治州は、カタルーニャ語の地位向上、ならびに知識と使用の拡大を目的として、精力的な言語政策を進めてきた。カタルーニャ自治州の言語政策は、国および自治州の公用語を定めたスペイン国憲法（1978年）第３条、ならびにカタルーニャ自治州の基本法であるカタルーニャ地方自治憲章（1979年）の規定を出発点としている。1983年には「カタルーニャ言語正常化法」によって言語正常化政策の基本原則が定められ、以後、カタルーニャ語の知識・使用の拡大を目的とする施策が行政、教育、文化、メディア等の領域を中心に進められた［竹中 2005：38］。

1990年代に入ると、カスティーリャ語圏外の開発途上国からの移民が急増し、カタルーニャ州の社会言語的状況を以前にもまして複雑化させた。言語正常化法がカタルーニャ語普及に果たしてきた役割にもかかわらず、２つの公用語に関する市民の権利・義務を完全に平等化するには、言語正常化法の枠組みでは不十分であるとの認識が徐々に広まった。他方、1996年のスペイン総選挙では、自治州の権限拡大に消極的で、カタルーニャ州の言語政策にも批判的な立場をとる保守系の国民党が勝利したが、過半数が取れなかった。そうした政局における政治的駆け引きの中で、州政府によって言語正常化法に代わる新法案として言語政策法が提示され、紆余曲折を得て、1998年に「言語政策法」の名のもとで新法が正式に施行された。

言語政策法は、言語正常化法以後に制定された個別規則の大部分を取り込んだことから、1990年代末までの言語政策の到達点を示すとともにその限界についても多くの示唆を与えている。カタルーニャ語には、カスティーリャ語とならぶ自治州の「公用語」としての地位に加えて、カタルーニャ州の「固有言語」としての地位が与えられたが、カタルーニャ語を知る義務については、強制力のない理念的な規定に止まった［竹中 2005：38-40］。

２．学校での「言語漬けプログラム」

竹中［2005］によると、カタルーニャ州の公的教育制度へのカタルーニャ語導入は、地方自治憲章制定前の1978年の政令によって始まった。当初は、カタルーニャ語を母語とする生徒に対してはカタルーニャ語で授業を行う一方、母語がカスティーリャ語の生徒には科目としてカタルーニャ語を教える、という２系統の制度が採用された。しかし、数年が経過した時点で、カタルーニャ語を教授語とする系統からは二言語話者が生まれるのに対し、科目としてカタルーニャ語を教える系統は実質的にカスティーリャ語の一言語話者しかもたらさないということが明らかになった。

1983年の言語正常化法では、カタルーニャ州の固有語であるカタルーニャ語は全教育段階の固有語

であるという基本原則が打ち立てられ、以後1992年までに、基礎教育段階におけるカタルーニャ語習得の確実化のために、「言語漬けプログラム」が確立された。

「言語漬けプログラム」は、カタルーニャ州における教育領域の言語政策の中心をなすものである。言語漬けプログラムにおけるカタルーニャ語の習得は、授業一般をカタルーニャ語で行うことによって達成される。現在、このプログラムは、カスティーリャ語を母語（第一言語）とする生徒が7割を超える基礎教育段階の学校において広範に実施されている。

必須の基礎教育を終えた生徒の大多数が進む中等教育、さらには大学教育におけるカタルーニャ語使用も重要である。中等教育については、基礎教育と同様、カタルーニャ語を教授語にするという基本方針が州政府によって示された。言語漬けプログラムに対しては、カスティーリャ語を母語とする父兄数十人によって言語選択の自由を根拠とする違憲立法訴訟が提起されたが、1994年、憲法裁判所により最終的に合憲判決が下された［竹中 2005：42–43］。

現行の2006年の自治憲章では、初等、中等教育における（スペイン語と外国語の授業を除く）全ての授業がカタルーニャ語で行われることが規定されている。他方、中央政府は、2013年12月に「教育の質向上のための基本法」を発布した。この法では、生徒のカスティーリャ語で教育を受ける権利を保証し、公立学校および公的助成で運営されている私立学校でカスティーリャ語での教育を受けられない場合には、（助成を受けていない）私立学校で受けられるようにし、その費用を州政府が負担するという内容が含まれており、明らかにカタルーニャを念頭に置いたものであった［松本 2015：80］。

3．言語使用の状況

フランコ体制下では、自治権が剥奪され、カタルーニャ語の公的な場での使用が禁止されたが、カタルーニャ語はその間も家庭内で話し続けられた［松本 2015：79］。2013年のカタルーニャ州の15歳以上の住民の内、カスティーリャ語の読み書き話す聞くという全ての運用能力がある者は95.9%、カタルーニャ語では60.2%である。最初に話した言語がカスティーリャ語である者は55.14%、カタルーニャ語である者は31.2%、アイデンティティの言語をカスティーリャ語とした者は47.55%、カタルーニャ語とした者は36.7%、普段使う言語がカスティーリャ語である者は50.7%、カタルーニャ語である者は36.5%、両方である者は6.82%である［Idescat 2013a,b］。

2013年言語政策報告書によると、カタルーニャ州の15歳人口の内、1981年にはカタルーニャ語が理解できる者が79.8%であったのが、2013年には94.3%に増加している。また1986年にはカタルーニャ語が理解できる者90.3%、話すことのできる者64.4%、読むことのできる者60.5%、書くことのできる者31.5%であった。その後年々割合が上昇し、2013年にはカタルーニャ語が理解できる者が94.3%、話すことのできる者82.4%、読むことのできる者80.4%、書くことのできる者60.4%になっている［Department de Cultura 2016］。約30年間でカタルーニャ語能力が伸びていることがわかる。また、バルセロナ人口の内、カタルーニャの外で生まれた者は40.5%であるが、その内カタルーニャ語が話せるのは72.3%と高い。

2013年言語政策報告書を分析した松本［2015］は、カタルーニャで生まれながら普段カスティーリャ語を話す者の割合が高いことや、2008年から2015年の５年間に、普段カタルーニャ語を話す者の割合が0.7ポイントしか増えておらず、カタルーニャ語とカスティーリャ語両方を使う者の割合が逆に5.2ポイント下がっていることから、カタルーニャ語能力の向上を楽観視できないと指摘している［松本 2015：83］。また、普段カタルーニャ語を使用している者の割合に比べて、医療機関や金融機関のような改まった場面で、カタルーニャ語を使う割合が高いことに注目している。医療機関や金融機関で働く場合は、行政機関や教育機関の場合のように、法的には定められなくとも実際にはカタルーニャ語能力が求められることを示唆している［松本 2015：84］。

Ⅱ．移民とカタルーニャ語使用

１．1960年代から1970年代の国内移民の場合

特に1960年代から1970年代にカタルーニャ州へのスペイン他地域からの移民の流入は、カタルーニャ州におけるカスティーリャ語話者の人口を増加させた。移住者の多くは南スペインからのカスティーリャ語話者であったからである。ウーランド［Woolard 2003］によれば、カスティーリャ人と通常呼ばれるこれら移民とその子どもや孫の世代は、現在、バルセロナ都市部の人口の少なくとも半数を構成している。そして、これらのカスティーリャ語話者は労働者階級に集中し、特に未熟練労働者が多い。他方で、カタルーニャ生まれのカタルーニャ語話者は、中産階級や上流階級に集中していることによって、カタルーニャ・アイデンティティは権威づけられ望ましいものと捉えられている［Woolard 2003：88］。

言語正常化法が制定された1983年当時、カタルーニャ生まれの両親を持ちカタルーニャで生まれた者の内93％は、カタルーニャ語が自らの主要言語であると主張していた［Woolard 2003：86］。フランコ政権化の言語政策によって、実際は全てのカタルーニャ人はカタルーニャ語とカスティーリャ語のバイリンガルである。これらカタルーニャ人は、いわゆるカスティーリャ人にはカスティーリャ語で、カタルーニャ人にはカタルーニャ語で話しかけていたので、エスニック・バウンダリーが維持された。さらに、ウーランドは自らの調査に基づいて、カスティーリャ語話者は、カタルーニャ人にカタルーニャ語で話しかけてもカタルーニャ人との連帯感を生みだすことは少なく、他方でカスティーリャ人同士の連帯感を失うことの方が大きいと指摘している［Woolard 2003：89］。

ウーランドはバルセロナの高校での調査に基づいて、若者のカタルーニャ語使用の現状についても述べている。カタルーニャ州の教師の多くは、熱心なカタルーニャ・ナショナリストであるが、カスティーリャ語話者の生徒が主流の高校の教師は、カタルーニャ語を生徒に教えることに絶望していた。なぜなら、生徒は授業中や教師にはカタルーニャ語を話すが、生徒同士ではカスティーリャ語しか話さないからであった。また、一人以外はバルセロナ生まれであるが、３分の１の生徒の両親が国

内移民である学校での生徒の言語使用の観察から、移民の親を持つ生徒が日常的にカタルーニャ語を使用するかどうかは、親の階級が関連していると指摘している。日常的にカタルーニャ語を使用しないカスティーリャ人生徒の親は、カスティーリャ人が主流の周辺地区に住む労働者階級であるのに対して、カタルーニャ語を日常的に使用するカスティーリャ人の親は、カタルーニャ人が主流の中産階級の多い中心部に住み専門職に就いていた。幼い頃からカタルーニャ人との日常的相互作用の機会の過多が、若者の日常的カタルーニャ語使用に影響を与えていることを明らかにしている。そして、カタルーニャ語を日常的に話す生徒は学校に適応しているのに対して、話さない生徒は学校から落ちこぼれ、学校教育によって階級が再生産されていると指摘している［Woolard 2003］。

カタルーニャ語の日常的使用は、親世代においては中流階級以上のカタルーニャ人と労働者階級のカスティーリャ人という区分に結びついていたが、次世代においてはカタルーニャ人とカスティーリャ人の区分を超えて階級区分と結びついていた。

２．1990年代以降の海外移民の場合

カタルーニャ州には、教育省の運営するカタルーニャ語振興のためのカタルーニャ語教室があり、これは特に移民を対象としたものではない成人教育である。それに加えて、州副首相局の運営する言語正常化コンソーシアムがある。これは、現在137行政府と協力してカタルーニャ語の知識と使用を普及することを目的としたもので、22ヶ所に言語正常化センターがある［CPNL 2016］。言語正常化センターは18歳以上の生徒を対象として、通学クラスの在籍生徒数は74, 601人、通信教育クラスの生徒は5, 000人以上で、コースを終了した生徒は76. 5％である。3, 455コースに在籍する生徒の内66. 3％は海外移民で、生徒の話す母語は100言語以上に及ぶ［CPNL 2016］。1980年代後半まで生徒のほとんどはカタルーニャ生まれで、公務員の職を得るための上級レベルに集中していた。しかし、1990年代以降の海外移民の流入で生徒の構成が変わり、スペイン語の知識があることを前提にすることはできず、教師はそれに対応して授業内容を徐々に変更しなくてはならなかった［Pujolar 2010：235］。

他方で、民間の語学センターによる成人教育は、海外移民へのカスティーリャ語教育に大きな役割を果たしてきた。これらは、移民が日常生活を送るにはカスティーリャ語の習得がより有益であるという考えに基づき、1990年代初めに宗教団体、NGO や社会福祉団体によって設立された。プジョラー［Pujolar 2010］は、2003年にカタルーニャ州北東部のいくつかの民間団体を対象に調査を実施した。その内の一つである移民に様々な社会的サービスを提供しているカトリック団体において、スタッフへのインタビューやモロッコ系や西アフリカ系女性が在籍するカタルーニャ語クラスの参与観察を実施した。その結果、カタルーニャ語クラスでも、授業内容の説明やクラス運営、インフォーマルな会話ではカスティーリャ語が使用されていた。基本的な言語能力を身につけるにはまずカスティーリャ語を習得することが必要であるとして、カタルーニャ語を教えるのは、既にカスティーリャ語を習得した生徒のみと考えられていたと述べている［Pujolar 2010］。

また、バルセロナの79校における12才から17才の3, 578名の海外移民の子どもを対象とした言語的

統合に関する2008年に実施された継続共同調査（Longitudinal Study of the Second Generation in Spain：ILSEG）の第一回調査結果によると、カスティーリャ語よりカタルーニャ語を好む者は、スペイン生まれが14％、６歳以前に来た者は4.2％、６歳以降に来た者は3.4％である。大卒で専門職の両親を持つ家庭で育った子どもの方がカタルーニャ語を好むことも示されている［Alarcón and Rubio 2013］。

Ⅲ　中国系移民にみるカタルーニャ語教育

1　言語正常化センター・レウラの取組み

バルセロナのサンタ・クローマ・ダ・グラマネート地区フォンドにある言語正常化センター・レウラ作成のカタルーニャ語で書かれた中国人向けパンフレット［CNL L'Heura 2017］によると、2017年の生徒数は1,836人で、その内の74.2％が海外からの移民である。生徒の内で最も多いのがモロッコ人で17％を占め、中国人は138人で約10％で、前年から31％増加している。この地区には4,077人の中国人が居住し、外国人人口の14％を中国人が占めている。中国人にとっては中国語とカタルーニャ語の差異が大きく、カタルーニャ語習得はとても困難であるので、2007年から中国人住民がカタルーニャ語を習得することによって社会統合を促進ためのプロジェクトが開始された。他の移民を対象としたこのようなプロジェクトはない。2007年以降、累計1,412人の中国人がカタルーニャ語教室に登録し、2017年には中国人だけを対象とした特別クラスが４つある［CNL L'Heura 2017］。一つの民族集団を対象とした特別クラスは中国人を対象としたものしかない。

以下、2018年９月の筆者による中国人担当のスペイン人スタッフへのインタビューによれば、カタルーニャ語教室は週に２レッスンあり、合計45レッスンで１ステップが終了する。語学力レベルはEU基準に準拠しているが、中国人のほとんどは入門レベルを習得することができない。その理由としては、仕事が忙しく継続的学習が難しいのと、移住前の教育レベルが低いことが挙げられた。中国語を話せるスペイン人スタッフは現在２名いるが、フォンドの中国人経営の店舗やレストランを一軒一軒訪問し、レウラの存在を宣伝し、病院に行くのも基本的なカタルーニャ語が必要であることを伝えカタルーニャ語教室に通うことを促している。中国人は口コミが重要で、パンフレットは役に立たなかった。インタビューをしたスタッフはレウラで９年間働いているが、中国人住民に教育程度の低い浙江省青田出身者が多いことや近年ではスペイン人経営だったローカル・バーを買い受けて経営する中国人が多くなってきている等、この地区の中国人の現状を把握していた。また、中国人向けパンフレットによると、中国人が用いるSNSアプリWechatにレウラのアカウントを開いて中国語で宣伝し、423人のフォロワーを獲得していた［CNL L'Heura 2017］。

レウラでは、カタルーニャ語教室に加えて、様々な課外活動も実施している。例えば、４月のカタルーニャのキリスト教聖人にまつわるサン・ジョルディの日は、親しい人にバラ１本と共に本を贈る

記念日とされているが、中国人生徒にも伝説の由来を教えカタルーニャ文化への理解を深めさせている。また、中国人経営の店舗での販売品をカタルーニャ語で表示する日を作ったり、市内の中華レストランでカタルーニャ語のメニューを提供できるようにサポートする活動も実施している。中国新年には、生徒がカタルーニャ語で中国語の特徴を説明するプレゼンテーションも行っている。

2　子どもへのカタルーニャ語教育の捉え方

以下、２名の高学歴な中国人女性の子どもへのカタルーニャ語教育の捉え方を検討する。

長春出身で長春の大学を卒業後北京で数年働いた後、2006年にスペインに留学した30代後半の中国人女性は、１年間語学学校でスペイン語を学んだ後で、スペインの私立大学で修士号を取得し、就労ビザでバルセロナの中国系の会社で働いている。カスティーリャ語は語学学校で学び上級レベルであるが、家庭教師から学んだカタルーニャ語は初級レベルである。仕事ではカスティーリャ語を話し、カタルーニャ語はカタルーニャ語で書かれたメールを読むだけである。中国で結婚し、彼女よりも３年前にスペインに移住した中国人の夫との間に３歳になる娘がいる。娘は私立学校[2]幼稚部に通いながら、週末は中国語補習校に通っている。バルセロナの学校で今後娘が上手くやっていくにはカタルーニャ語を学ぶ必要であると考え、週に３回１時間、１回10ユーロで家庭教師を雇って娘にカタルーニャ語の勉強をさせている。本心としては、汎用性の低いカタルーニャ語を娘に学ばせたくないが、バルセロナの学校で娘が今後上手くやっていくにはカタルーニャ語が重要と考え、仕方がないので家庭教師を雇っていると述べた。

瀋陽市出身で幼少時から成績優秀で16歳で瀋陽市の大学に入学した30代後半の中国人女性は、中国でトップ大学の受験に失敗したことから、他の人と違うことがしたいと大学卒業後20歳でドイツ留学をした。２年後に西欧在住中国人の若者ネットフォーラムを通してイングランドに留学中の夫とで出会い、５年後に結婚した。夫の父親は通訳で、夫が12歳の時に家族でスペインに移住していた。夫はスペインのインターナショナル・スクールに通った後で、イングランドの大学に留学した経験があった。彼女は結婚後にスペインへ移住した。

彼女はドイツ留学中に法学を勉強し修士課程を修了し弁護士資格を取得していたので、スペイン移住後は中国人経営の法律事務所で弁護士として働いた。最初はカスティーリャ語もカタルーニャ語もわからず苦労したが、学校で学んだことはなく、仕事を通して習得し、現在は両言語とも問題なく使用できる。スペイン移住の数年後には独立して、現在は中国人顧客を相手に投資永住権の問題を扱う法律事務所を経営している。

彼女には５歳半の息子がいるが、住居のある中産階級のスペイン人の多い地区のセミ私立学校幼稚

2　スペインの学校は３種類に分類される。第一に公立学校（colegios publicos）、第二に国から助成を受け多くがカトリック教会に付属しているいわゆるセミ私立学校（colegios concertados）、第三に私立学校（colegios privados）の３種類がある。スペインの学校における５歳から19歳の中国系の子どもは、2002年には5, 587人であったが、2018年には39, 904人になり、約15年間で７倍となった［INE 2018］。

部に３年間通った。25人のクラスに中国人は２人で、幼稚園はとても良かったが、問題は教授語の９割がカタルーニャ語であったことである。この幼稚園の上にある小学校にこの９月から通わせるかどうか迷ったが、結局、カタルーニャ語を中心的に学ばせたくなかったので、車で20分のところにある私立小学校に通わせることにした。この私立小学校の教授語は、カスティーリャ語とカタルーニャ語、英語が３分の１ずつである。息子は将来どこに暮らすかわからないので、英語を学ぶことは特に大切だと考え決断したと述べた。息子は両親とは中国語で会話し読み書きも両親から学んでいるので、第一言語は中国語である。彼女の両親も４年前に瀋陽市からバルセロナに移住し近所に住んでいるが、息子は夏休み２か月間、祖母と共に瀋陽市に戻り、中国語の子ども向け個人レッスンを受けた。バルセロナの中国語補習校よりも、中国での中国語個人レッスンの方がレベルが高いと述べた。

３　若い世代にみるカタルーニャ語教育とアイデンティティ形成

（１）スペイン生まれの場合

以下５名のスペイン生まれの中国系の若者のカタルーニャ語の学習体験とアイデンティティ形成について検討する。

バルセロナの近郊の村で生まれ育った、現在バルセロナの大学院修士課程で心理学を専攻する26歳女性は、小学校から高校まで村の公立学校で教育を受けた。学校での教授語の９割はカタルーニャ語であり、カタルーニャ語もカスティーリャ語も同程度に使用でき第一言語となっている。14歳から16歳まで中国語補習校に通ったが、中国語は話せるが読み書きはできない。学校では中国系は彼女だけでほとんどがスペイン人の子どもで、特に高校ではアイデンティティの問題に悩んだ。バルセロナの大学では自らの抱えるアイデンティティの問題を解決したいと心理学を専攻した。彼女の祖父は1950年代に共産党を逃れて台湾に渡り、その後南米の大使館で働いたことから家族が特別なビザを取得することができた。それによって彼女の父親は33歳の時1978年にスペインに移住し、レストランや他のビジネスを営んできた。彼女が育った村は、カタルーニャ人としてのアイデンティティが強く独立賛成派が住民の９割以上を占めていた。彼女は、自分は中国人でありカタルーニャ人であるが、スペイン人とは思わないと語った。そして、見かけが中国人であることによってカスティーリャ語で話しかけられることに不快感を抱いていた。

両親が青田出身でバルセロナ生まれ育ちの21歳の法律を専攻する男子大学生は、両親がレストランの仕事で忙しいため、生後２ヶ月から５歳までスペイン人家庭に預けられた。このスペイン人家庭は1960年代のアンダルシアからの移住者であったので、家庭ではカスティーリャ語を話していた。幼稚園から小学校２年生まで公立学校に通い教授語の９割はカタルーニャ語で中国人は自分だけであった。６歳から７歳まで中国語補習校に通ったが、中国語の能力は低かった。母親が離婚したために小学校３年生から２年間青田の祖母の元で過ごしたので、中国語が上達した。小学校５年生でバルセロナの公立小学校に戻った。12歳から18歳まではセミ私立学校であるカトリック男子校に通い、成績は常に一番であった。教授語はカタルーニャ語とカスティーリャ語と英語が３分の１であった。彼の第

一言語はカタルーニャ語とカスティーリャ語が同程度である。15歳から16歳の時、自分はスペイン人であると思っているのに、他の人に中国人とみられることでアイデンティティに悩んだことがあったが、自らをカタルーリャ人として位置づけたことはない。中国系の友人はいない。将来は海外留学したいが、バルセロナが好きなので留学後はここに住み、親に反対されてまだ中国国籍であるが、スペイン国籍を取得したい。

両親が青田出身でカタルーニャ州の海岸の町で18歳まで生まれ育った23歳の女子大学生は、幼稚園から高校までその町の公立学校に通った。教授語は９割がカタルーニャ語で、中国人は自分だけであった。母親は16歳でスペインに移住し、彼女が９歳の時に離婚したが、教育程度の低い青田出身者の中では珍しく高校卒で、家庭ではスペイン語を話した。母親は彼女が英語を学ぶことが大切と考えて、10歳から６年間、英語の個人レッスンを受けさせたので彼女の英語能力も高い。中国語補習校は２日間でやめたが、それは他の子と同じように中国語が話せず、疎外感を抱いたからであった。中国語の読み書きはできないが、会話はできる。第一言語はカタルーニャ語とカスティーリャ語が同程度であり、カタルーニャ人アイデンティティが強い人にはカタルーニャ語で、そうでない人にはカスティーリャ語で話しかけるというように、人によって使い分けているが、それは難しいことではなく自然にできる。家族が中国人であることが嫌で自己肯定できなかった時期もあったが、18歳で大学入学後に文化的多様性のあるバルセロナで一人暮らしをしたことによって視野が広がり、アイデンティティの危機を乗り越えることができた。自らのことをスペイン人であり中国人でもあると思い、二つの文化があることをありがたいと思っていると述べた。中国系の友人はいない。カタルーニャ人として自らを位置づけたことはなく、カタルーニャ州の独立には中立的立場である。バルセロナはとても好きでありホームであると思っている。

バルセロナで家族と暮らす17歳と19歳の大学１年生と３年生の姉妹は、マラガで伯父と中華レストランを共同経営する青田出身の父と温州出身の母の間に生まれた。10年前にバルセロナにレストランを移転することになって引っ越し、姉妹はそれぞれ、バルセロナのセミ私立学校幼稚部最終学年と小学校１年に転入した。このセミ私立学校では自分達だけが移民の子どもで、人種差別もあり、いつも他の子どもと「違う」と感じていた。友人は、小さい頃から両親に連れられて毎週通っている中国系プロテスタント教会で出会った中国系の方が多い。

姉妹は家庭では両親と北京語を話す。母の出身の温州語は少しわかる程度で、父の出身の青田語は全くわからない。小さい頃から中国系教会に通い３歳から15歳までは教会附属の中国語補習校にも通った。姉は中国語の読み書きはできるが、妹は中国語があまり好きではなく、読むことはできるが書くことは苦手である。バルセロナの学校では、カスティーリャ語と英語の授業以外の科目はカタルーニャ語で学んだ。マラガではカタルーニャ語を学んでいなかったので、放課後午後５時から７時まで毎日カタルーニャ語の補習があった。カスティーリャ語と似ているので、カタルーニャ語習得はそんなに大変ではなかった。姉妹同士は北京語かカスティーリャ語で話し、カタルーニャ語を話すことはない。姉妹とも、スペイン人よりは中国人であると思うと語った。カタルーニャ人としての意識

は持っていない。

（２）10代でバルセロナに移住した場合

以下、10代でバルセロナに移住した中国系の若者２名のカタルーニャ語の学習経験とアイデンティティ形成について検討する。

2010年に12歳で蘇州からバルセロナに移住した19歳男性の父親は、コックとして働いていた国営企業が倒産し、友人の紹介でバルセロナのレストランで働くことになったが、最初は不法滞在であった。父親が正規化後、彼は母親と共にバルセロナに移住し、バルセロナのセミ私立中学校の１年生に入学した。カタルーニャ語を一週間に７、８時間、１クラス４、５人の取り出し教室で３年間学んだ。この取り出し教室以外の時間は普通学級で学んだが、カタルーニャ語の能力不足に配慮して、教師が易しい課題を出してくれた。このセミ私立学校では、移民の子どもの３割がスペイン生まれであった。学校の近くにフィリピン人集住地区があったので、移民の子どもの半数はフィリピン人で、中国人は全校で10人以下、他はロシア系の子どもであった。教授語は、スペイン語とカタルーニャ語、英語が各３割で、２年生から選択したドイツ語が１割であった。また、親に薦められて大人向けのカタルーニャ語教室にも放課後に通っている。第一言語は北京語であり、自らを中国人として位置づけていた。

青田生まれの30歳女性は、４歳の時に両親がバルセロナに移住したので、母方祖父のいる杭州で育てられ、16歳でバルセロナにいる両親に合流した。ニューカマーの子どもにカタルーニャ語を教える全日制学校に半年間通い、修了試験に合格してセミ私立中学校４年生として普通学級に移行した。教授語は９割がカタルーニャ語であった。移民の子どもは自分しかおらず、カタルーニャ語能力は学習に十分なレベルではなかったが、教師がとても親切で助けてくれた。高校ではテクノロジーを専攻し、数学が良くできたので、大学受験に合格し、大学３、４年では上位１割の特待生として特別クラスに在籍し、通常の学習を半年間で終えた。その後の半年はインターンシップとしてフルタイムで働いた。第一言語は中国語である。青田出身で12歳でバルセロナに家族で移住した夫と現在３歳になる娘がいる。娘はセミ私立幼稚園に通い始めた。彼女は自らを中国人として位置づけていた。

Ⅲ　考察

2000年代に急増した中国系第一世代は、浙江省出身の教育程度の低い者が７割を占める比較的同質な集団であった。バルセロナの中国人集住地区サンタ・クローマ・ダ・グラマネート地区にあるレウラでは中国人向けの特別な取組みがされていたが、それが教育程度の低い中国人住民のカタルーニャ語能力の向上に役割を果たしているとはいえず、中国人住民のカタルーニャ語能力は低いことがわかった。しかし、レウラの取組みによって、店の販売品をカタルーニャ語で表示したり、中華レスト

ランでカタルーニャ語メニューを提供することは、主流社会における中国人イメージを良くする役割をある程度は果たしているといえるのではないかと考える。

カタルーニャ州の言語をめぐる言説は、1980年代はカタルーニャ語をナショナル・アイデンティティとして強調し二言語教育を実施してきたが、1990年代からの海外移民の流入以降、カタルーニャ語を多言語社会における社会統合を促進する媒介としてその役割を強調するよう転換した［Pujolar 2010：230］[3]。レウラの中国系住民に対する取組みは、社会統合に多少の役割を果たしているといえる。

中国系移民の中では少数派であるが20代以降でスペインへ移住した高学歴者は、カタルーニャ語能力は低くともカスティーリャ語は習得し、子どもに汎用性の低いカタルーニャ語を学ばせることには抵抗感を抱いていた。英語も学べる学校に子どもを転校させる者もいれば、抵抗感を抱きながらもカタルーニャの学校では必要な言語と捉え、個人レッスンで子どもにカタルーニャ語を学ばせる親もいた。母語がスペイン語で労働者階級地区に住む国内移民やラテンアメリカや中央アメリカからの移民やその子どもは、カタルーニャ語をカタルーニャ州での社会的上昇を達成するための有効な社会資源として捉えていると指摘されている［Alarcón, Rubio and Yiu 2014：16］。それは、中国系移民の高学歴な母親にも当てはまっていた。そして、子どもに社会的上昇を望む高学歴な母親は、学校でカタルーニャ語を中心的に学ばせない選択をすることによって、子どもにトランスナショナルな進路選択の可能性が開かれると考えていた。

中国系の若い世代においては、スペイン生まれの者も10代でカタルーニャへ移住してきた者も、学校でカタルーニャ語をカスティーリャ語よりも優先的に学んでいたのは共通していた。カタルーニャで小学校から教育を受けた者は、第一言語がカタルーニャ語とカスティーリャ語と同程度であり、カタルーニャ人意識の強い者にはカタルーニャ語で、そうでない者にはカスティーリャ語で話しかけるというスイッチを自然に身につけていた。

筆者がこれまでインタビューをした中国系移民の中で、カタルーニャ人としても自らを位置づけていた者は、前述したカタルーニャ独立賛成派が大多数を占める村で生まれ育った26歳女性だけであった。スペイン生まれの中国系の若者の中にはアイデンティティの危機を経験した者がいたが、自らの位置づけをスペイン人と中国人の間で捉えていて、カタルーニャ人と中国人との間で葛藤を経験していた者はこの26歳女性だけであった。10代で移住してきた者の第一言語は中国語であり、中国人として自らを位置づけていた。つまり、カタルーニャ語をカスティーリャ語より優先して学習をしても、それがカタルーニャ人としてのアイデンティティ形成につながるとはいえないことが、中国系の若い世代の事例からわかった。

そして、この26歳女性は、中国人として見られることによってカスティーリャ語で話しかけられることに不快感を抱いていた。ここには、プジョラー［Pujolar 2010］が指摘するように、行政はカタ

3　バルセロナが2009年から実施している革新的な間主観主義（インターナルチュラリズム）政策は、平等と多様性、相互作用を三つの柱とする移民を含む住民全体の積極的な交流から多文化共生を目指す政策であるが、カタルーニャ語を習得することは住民の交流を促進すると捉えられている。

ルーニャ語を機能的公用語として扱うのに対して、多くの人々がそれを内部の少数言語とみなし、部外者に話すには適さないと捉えている矛盾した状況があることが示されているといえる。中国人とカタルーニャ人との間でアイデンティティの葛藤を経験した彼女が、年を経るごとに中国人としてのアイデンティティが強まったと語った要因の一つに、カタルーニャ語のもつ排他的な側面があるのではないかと考える。

近年、親の教育程度が低くとも、中国系次世代に大学進学者が増加してきている。カスティーリャ語を日常的に話しカタルーニャ人として自らを位置づけない海外移民の次世代が社会的上昇を遂げることは、カタルーニャ語話者が社会の上層を占めてきたカタルーニャの社会構造を変革させていく可能性があるのではないかと考える。

おわりに

筆者はヨーロッパの中国系移民を対象に数十年に亘って調査を実施してきたが、カタルーニャのような二つの公用語が併存する地域における調査は初めてであった。バルセロナの中国系の若い世代の教育とアイデンティティ形成の問題を検討するには、カタルーニャ語教育とアイデンティティ形成の関係性を考察することが必要であると考え、本論で取り上げて検討した。そして、親の教育程度が低くとも、中国系次世代に大学進学者が増加していることは、学校教育によって社会階級を再生産してきたカタルーニャ語をめぐる状況を今後変化させる可能性がある。中国系次世代における大学進学者の増加の理由を検討することは次なる重要な課題である。

附記：本論は科研費基盤研究（B）（海外学術調査）「EU における中国系新移民の子どもにみるトランスナショナリズムに関する教育人類学的研究」（研究代表者：山本須美子、平成29から32年度）の研究成果である。

【参照文献】

川上茂信
2009「スペインにおける言語状況と言語教育」『平成18-20年度科学研究費補助金「拡大 EU 諸国における外田語教育政策とその実効性に関する総合的研究」研究成果報告書』213-226頁。
竹中克行
2005「カタルーニャのカタルーニャ語――言語正常化政策の道程と将来への展望」坂東省次・浅香武和編『スペインとポルトガルのことば――社会言語的観点から』同学舎　37-57頁。
松本純子
2015「カタルーニャ自治州におけるカタルーニャ語の保護と振興」『名古屋外国語大学外国語学部紀要』49：79-106。
深澤晴奈
2015「新しい移民流入国としてのスペイン――社会統合製作の形成と市民社会の反応（特集　移民国家のつく

られ方――アメリカ・オーストラリア・スペインの比較）『アメリカ太平洋研究』15：47–57。
福田牧子
2000「カタルーニャ語のカスティーリャ語化」『ロマンス語研究』33：33–42。
2013「多言語社会における日本人の言語使用――スペイン・カタルーニャ自治州在住の日本人のケース」『社会言語科学』15（２）：15–32。
山本須美子
2018「スペインにおける「新しい」中国系コミュニティの形成と特徴」『東洋大学社会学部紀要』55（２）：17–31。
Alarcón, Amendo Alarcón and Sònia Parella Rubio
2013 'Linguistic Integration of the Descendants of Foreign Immigrants in Catalonia', *Migrations Internationales* 7 – 1 : 101–130.
Alarcón, Amendo Alarcón, Sònia Parella Rubio and Jessca Yiu
2014 'Educational and Occupational Ambitions among the Spanish 'Second Generation ': The Case of Barcelona', *Journal of Ethnic and Migration Studies* 40–10: 1641–1636.
Beltrán Antolín, Joaquín
1998 'The Chinese in Spain', in Benon, Gregor and Frank N. Pieke（eds.）, *The Chinese in Europe*, London: Macmillan Press, pp.211–237.
2005 'Chinese Entrepreneurship in Spain: The Seeds of Chinatown', in Spaan, Ernst, Felisitas Hillman, and Ton van Naerssen T.（eds.）, *Asian Migrants and European Labour Markets*, London: Routlege, pp.285–308.
CNL L'Heura
2017 *Memòria 2017*: Pla de dinamització, lingüística de la població xinesa a Santa Coloma de Gramenet
CPNL
2016 *Memòria 2016*, Barcelona: Consorci per a la Normalització Lingüística.
Masdeu Torruella, Irene
2014 *Mobilities and Embodied Transnational Practices: An Ethnography of Return*(*s*) *and Other Intersections between China and Spain*. Phd Thesis submitted to Autonomous University of Barcelona, Faculty of Translation and Interpretation.
Nieto, Gladys
2003 'The Chinese in Spain', *International Migration* 41– 3 : 215–237.
Pujolar, Joan
2010 'Immigration and Language Education in Catalonia: Between National and Social Agendas', *Linguistics and Education* 21: 229–243.
Sáiz Lópey, Ameliá
2004 'The Languages and Their uses in the Chinese Community in Catalonia', *Paper for CIIMU International Seminar*（*22–24 January, 2004*）*: Between Diversity and Inequality, Children's Experiences of Life and School in Multicultural Europe*, pp.116–135.
Woolard, Kathryn A.
2003 '«'We don't Speak Catalan because We are Marginalized'. Ethnic and Class Meanings of Language in Barcelona', Blot, Richard（ed.）, *Language and Social Identity*, Westport, CT: Praeger, pp.85–103.

（ウェブサイト）
Department de Cultura
2016　*Informe de politica Linguistica 2013*、Generalitat de Catalunya
（http://llengua.gencat.cat/web/.content/documents/informepl/arxius/IPL2016_web.pdf、2018 年10月25日閲覧）
Instituto Nacional de Estadístia（INE）
2018　Resident Population by Date, Sex, Age group.
（http://www.ine.es/jaxiT 3 /Tabla.htm?t=9674&L= 1 、2018年11月24日閲覧）
Instituto Nacional de Estadístia（INE）, Comunidad de Madrid
2017　Observatorio de Inmigración - Centro de Estudios y Datos

（http://www.madrid.org/cs/Satellite?c=CM_InfPractica_FA&cid=1354273641612&language=es&pagename=ComunidadMadrid%2FEstructura&pv=1354273649335、2018年11月24日閲覧）
Instituto Nacional de Estadístia de Catalunya（Idescat）
2017 Foreigners with residence permit. By country of nationality. Provinces.
（https://www.idescat.cat/pub/?id=aec&n=272&lang=en、2018年７月30日閲覧）
2013a Language Uses of the Population. Population aged 15 years or more.
By knowledge of languages
（https://www.idescat.cat/pub/?id=aec&n=1013&lang=en, 2018年７月30日閲覧）
2013b Language Uses of the Population. Population aged 15 years or more.
By linguistic identification and most frequent languages
（https://www.idescat.cat/pub/?id=aec&n=803&lang=en、2018年７月30日閲覧）

【Abstract】

Present Circumstances of Catalan Language Use and Education among Immigrants in Barcelona: Case of the Chinese

Sumiko YAMAMOTO

This study examines the circumstances of the Catalan language use and education among immigrants in Barcelona, focusing on the Chinese based on fieldwork I conducted in September 2017 and 2018. Catalan is, along with Spanish（Castilian language）, the official language of Catalonia. It should be noted that the number of Chinese immigrants in Barcelona has rapidly increased since the 2000s.

First, this study traces the historical background of language policies in Catalonia, explaining the Immersion Program in schools and how people use Catalan and Spanish contemporarily. Second, it examines how circumstances of language use have been changed by the influx of the immigrants from southern Spain since the 1960s and those from abroad since the 1990s. Third, this paper illuminates the actual circumstances of Catalan use and education among Chinese people based on interviews with the staff of Centre de Normalització Lingüística L'Heura in charge of Chinese residents in Santa Coloma de Gramenet, Chinese mothers who pursued higher education, and young Chinese people.

The study concludes by outlining that Chinese first-generation individuals exhibit minimum abilities of speaking and writing Catalan and Castilian, despite L'Heura's efforts to teach Catalan. In contrast, many young Chinese who obtained a higher education have well-developed abilities of speaking and writing Catalan and Castilian. However, there are a few Chinese young people who have become Catalan nationalists because of the prioritization of Catalan in their educational experiences.